



京都市社会教育委員が学校や地域に出向き、特別授業などを行う「京まなびミーティング」。

第31回（令和3年9月10日実施）と第35回（令和4年5月20日実施）の2回にわたって、本郷 真紹委員に京都アスニーの「アスニー特別講演会」において、「日本仏教の形成－聖徳太子から最澄へ」「最澄と空海－平安仏教・二つの巨星－」という、連続するテーマでご講演いただきました。

講師 京都市社会教育委員会 委員 **本郷 真紹** 先生
学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授

講演 第31回（令和3年9月10日）「日本仏教の形成－聖徳太子から最澄へ」
第35回（令和4年5月20日）「最澄と空海－平安仏教・二つの巨星－」



「日本仏教の形成」－聖徳太子から最澄へ－

〇はじめに

今日は、日本の古代の仏教というものがどういう過程を経て形成されていったのかということについて講演いたします。

今日、日本人は大体92%が仏教徒だと言われており、日本は仏教国の一つとも言われているんですけども、何をもって仏教徒と言えるのかというのは定義がなかなか難しいところです。2022年が一つの日本の仏教史の流れから申しますと大きな節目の年でありまして、実は聖徳太子が亡くなられてちょうど1400年目なんです。比叡山延暦寺を開かれました伝教大師最澄は、亡くなられてから1200年目です。つまり聖徳太子のちょうど200年後に最澄は亡くなられているんです。

偶然その200年後に亡くなられたというだけではありません。聖徳太子は、中国の仏教史上で有名な南岳慧思という僧の生まれ変わりと奈良時代から信じられていたんです。南岳慧思の存命中に聖徳太子が生まれていますから、生まれ変わりはあり得ないんですけども、そういうふうに信じられていた。その南岳慧思というお坊さんのお弟子さんが、中国で天台宗を開かれた、天台智顗という方なんです。その約200年後に生まれた伝教大師最澄は、この天台智顗の生まれ変わりと言われていているんです。つまり、聖徳太子は南岳慧思の生まれ変わり、伝教大師は天台智顗の生まれ変わりというような形で、両者が密接な関係で説かれるようになったというのが一つの特色なんです。

このお二方を結びつける一番の絆は何かと言うと、天台宗で最も大事にされたお経の思想。仏教には、一切経とか大乘経と言われるように、多種多様な教義を含んだお経がありますけども、その中で天台宗が一番基本に据えたお経というのは法華経・妙法蓮華経です。天台宗の正確な名称

は天台法華宗です。その法華経と切っても切れない関係にあるのが聖徳太子です。聖徳太子は法華経を時の推古天皇に対して丁寧に講説された。そしてまたその注釈書であるところの法華経義疏というのを著された。そういうご縁で、聖徳太子と最澄というお二方は繋がっているというふうにお受け取り頂ければと思います。

聖徳太子を象徴する出来事というのは、憲法十七条、そこにおける仏教信仰の奨励ということになるかと思えます。実は最近、この聖徳太子につきまして、古代史の学界でも議論が高まって参りまして、研究者の方々の中で聖徳太子というのは、その伝えられている内容の大半が後世の作り事で、実態としては用明天皇に厩戸王という一人の王がいたということしか確言できない。厩戸王が推進したとされる政策は、後世になってから作り上げられたものということで、聖徳太子虚構説などというものが出されました。聖徳太子という名称自体、奈良時代の半ばの、日本で一番古い漢詩文集の「懷風藻」に出てくるのが最初。日本書紀には、「上宮太子」とか、「厩戸王」という形でしか出てこないんですね。

それに対して、やはり法隆寺に現在残っております金堂の釈迦三尊像の光背銘とか、中宮寺の天寿国繡帳など、日本書紀が成立するよりも前に作られたと目される史料に、聖徳太子が熱心に仏教信仰されたということが書かれているのだから、100%日本書紀が作り上げた人物像だとみなすということはおかしいという意見も出てまいりまして、ここ数年の状況から申しますと、むしろ聖徳太子は再評価されています。日本書紀というのは確かにあった事実を忠実にそのまま書き記すということの方針に作られた歴史書ではありません。明らかに、当時成立したばかりの律令国家という中央集権国家が日本列島を統べ治めていくうえで、然るべき過程を経て成立してきた体制だということを、歴史

に裏付けさせるために作られた歴史書です。ですから、
いざなぎ いざなみ あまてらすおおみかみ
伊弉諾・伊弉冉の国生みから始まって、天照大神が
れて、その孫にあたる瓊瓊杵が降臨して、その子孫にあ
る神武が東征して大和に入ったところからずっと今日に至
るまで、その子孫に当たる歴代の天皇が治めてきたという
ような形で筋を立ててきたんですけども、当然のことな
がら、そのまま事実と受け止めるということはできず、一定
の作為で作られた歴史書であることは間違いない。

同じように聖徳太子に関して、当時の朝廷にとって都合の良ように改変されて作り上げられたという可能性は当然否定できませんが、実在しなかったものを実在したが如くに書いた可能性もあれば、逆に、実際の内容を省略して、あるいは意図的にそれを無視して書いた可能性も考えなければならないと思います。結論的に申しますと、むしろ聖徳太子の実像よりもかなり狭めて書いている可能性の方が高いんじゃないかと思います。

日本書紀の聖徳太子関係の記事を見ますと、聖徳太子が単独で行ったとされる事績は限られます。例えば、仏教の興隆は、推古天皇が命令を下して行かせたという形にしています。その詔を出した対象は、聖徳太子だけではなく、時の権力者だった蘇我馬子と二人に命じて仏教を興隆させたと書いてるんです。蘇我馬子と言いますと、西暦587年に一番の政敵であった物部守屋を攻め滅ぼし、朝廷で並ぶものがない地位を確立した人物です。日本書紀はあたかも仏教受容の可否を巡って、蘇我氏と物部氏が争ったと書いていますが、本質はそうではなくて、純粋な権力争いです。その物部氏を討つ軍勢の中に、蘇我氏の血を色濃く引いた厩戸王が従軍していて、四天王に戦勝を祈願し、この戦に勝った暁には四天王のためにお寺を建てましようと言われた。戦が勝利に終わったすぐ後に、厩戸王が四天王寺の建立にかかれたと日本書紀には書いてるんですけども、残念ながら現在の四天王寺の境内等を調査した結果出てくる遺跡というのは、寺院の建立を発願したと言われている時からほぼ30年経ってから造られ始めたものなんです。同じように、戦に勝った暁にはお寺を作るということを誓願して蘇我馬子が建てたのが、飛鳥寺ということになっていますが、こちらの方は戦が終わってからすぐに建築に取りかかったというのが、遺物によって明らかになっています。日本で最初に建てられた本格的な伽藍を持つお寺は、この飛鳥寺なんです。

西暦645年6月に飛鳥板蓋宮で起こりましたクーデターによって、蘇我馬子の孫にあたる蘇我入鹿が
なかのおおえのおうし なかとみのかまたり
中大兄皇子や中臣鎌足らによって暗殺されました。結局、蘇我本宗家は滅ぼされ、蘇我氏が存在を蔑ろにした大悪人だと言われるような取り扱いを受けることになりませんが、何故か日本書紀が成立する段階に至るまで、最も日本

の寺院の中で、多数のお坊さんがいて仏教の中心であった寺院は、7世紀を通じて間違いなく飛鳥寺です。一方で、
じよめいてんのう
舒明天皇の発願によります百済大寺、後の大官大寺・大安寺とか、
てんむてんのう
天武天皇が皇后の病氣平穏を願って建てられた薬師寺というような官寺が建てられますけれども、明らかに奈良の都が造られる前までは、蘇我氏が建てた飛鳥寺が仏教の中心だったんです。そういうことを勘案して、改めて聖徳太子の事績というのを振り返ってみると、馬子と一緒にではなくて、聖徳太子だけが行ったという政治的な業績は殆どないのです。

聖徳太子が単独で行ったとされるのが、十七条憲法の起草です。この十七条憲法の中に、第二条「篤く三宝を敬え、三宝とは仏法僧なり」とあります。聖徳太子が日本仏教の祖、あるいは和国の教主などという形で後世崇められた、いずれの宗派においても聖徳太子は例外なく崇められた一番の要因は、十七条憲法のこの一条（第二条のこと）にあると思いますが、この点に関して、本当にそういう評価、受けとめ方でいいのかということ、やはり少し疑問に思われます。

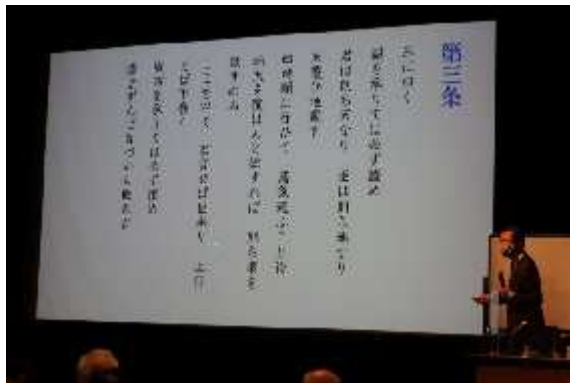


第一条「一に曰く 和を以て貴しとし 忤ふることなきを宗とせよ 人皆党有り また達する者少なし ここを以て 或いは君父に順ばず また隣里に違ふ 然れども 上和げば下睦ぶ ことを論ふにかなふときは 事理自づから通ふ 何事か成らざらむ」。これもまた、よく道徳的な訓戒として扱われる「和を以て貴しとす」という文言。この「和」というのはですね、もともと前提として乱れている、好ましくない状況にある、それが和むのが「和」です。ですから和というのを訓読みすると「なごむ」です。

先ほど申しました「篤く三宝を敬え 三宝とは仏法僧なり 即ち四生（ありとあらゆる生きるもの）の終帰にして（行きつくところであって） 萬国（いたれる国）の極宗なり（極まりである） 何れの世いずれの人 この法を貴ばざらんや 人尤も悪しきもの鮮なし 能く教ふれば従う 其れ 三宝に帰せすんば 何を以てか枉（まが）れるを直さんや」という文章、まさに、仏教というものをもってしなければ、様々な矛盾点というのがそのままということになりますよと説くわけです。

第三条はですね、「詔を承りては必ず謹め 君即ち天なり

臣は即ち地なり 天覆ひ地載す 四時順に行ひて 萬氣通ふこと得 地天を覆はんと欲すれば 即ち壊を致すのみ
ここを以て 君言せば臣承り 上行えば 下靡く 故詔を承りては必ず慎め 謹ますんば自ずから敗れむ」本来、憲法という理念からいたしますと、私はこの条文が第一条に来てもいいかなと思います。大体、明治憲法でも現憲法でも、最初天皇の位置付けから始まりますから。そういった意味では、これが第三条に来るとするのは、それなりに意味があると思いますが、詔（天皇の命令）には絶対服従なさい、君（天皇）というのは天であると。それに対して豪族は地であると。天地の関係、天が上であって地が下におると。これが逆転すると、「地天を覆はんと欲すれば 即ち壊を致すのみ」つまり破壊的になると。だから上下の身分秩序、とりわけ天皇の地位というのは絶対的なものとい



うことを皆承知せよと訴えているのが第三条です。

第四条です。「四に曰く 群卿百寮 礼を以て本とせよと。其れ民を治むるの本 要は礼に在り 上礼さざれば下齊はず 下礼すること無くば 以て必ず罪すること有らむ ここを以て 群臣礼すること有らば位次乱れず（順序ですね） 百姓礼すること有らば 国家自ずから治まらむ」即ち、礼が大事であると。いかにも儒教道徳的に、礼の秩序というものが上下関係を規定する。礼をわきまえておれば、決して乱れることはなく、すべて組織はうまく治まるということを説く。

申し上げたいことは、この第一条・第二条と、第三条・第四条というのは、ある意味では対句的な置き方になっておりまして、まず「和」が大事であると、そのためには仏教信仰を進めなければならない。天皇の詔は絶対的であり、そのためには礼の秩序を入れなければいけない。目的と手段という形で第一条から第四条を配列している訳です。もしこのような受け止め方が正しいとすれば、聖徳太子が仏教信仰を進めた一番の目的は、「和」をもたらすこととなる。これ以前の日本の朝廷の状況を見ますと、有力な豪族たちが対立を繰り返している。これでは生産的でないので、停戦協定を結んで一つにまとまりましょうということで出来上がってきたのが大和朝廷です。その同盟を結ぶときの中心になってきたのが天皇家なんです。だから天皇家という

のは、本来ほかの豪族たちと肩を並べる一つの豪族であって、同盟関係の中での代表格というのが天皇家の位置付けだったわけです。

ところが、日本書紀をひも解いてすぐにわかりますけれども、常に争いが起こります。争いが起こるきっかけとして多いのは、天皇の代替わりです。天皇、正確にはこの頃には大王（おおきみ）と呼ばれていましたが、大王が亡くなりますと、有力な豪族連中が皆で話し合って次に誰を大王にするかを決めました。当然、豪族それぞれの利害関係が反映されますから、得てしてそれは争いを引き起こすことになる。

古代史上、最も画期的と言っても過言ではない天皇に、5世紀の末に出られた雄略天皇（ゆうりやくてんのう）という方がおられました。この人は倭王武と中国側の史料に言われた人で、あるいは埼玉県（さいたま）の稲荷山古墳の鉄剣の銘文や熊本県江田船山古墳にもワカタケル大王と出ています。つまりワカタケルという名前と呼ばれていた大王というのが、北関東から九州中部にかけての地域を大和政権の勢力下に置いたという、それだけ画期的なことを行った天皇が倭王武・雄略天皇です。この雄略天皇は、自分の兄にあたる王子を片っ端から殺して行って天皇の位に就いた人です。いうならば天皇家内部の骨肉の争いが日常的に起こるんです。これでは、日本が一つの国家体制を築いて、南北朝が統一されて隋という大帝国が築かれたという激動の状況に太刀打ちすることはできないんです。だから何が大事かということ、豪族間の「和」。あるいは天皇家内部の「和」。いずれにしても、それぞれの主義主張があって人間というのはなかなか一つにまとまることはできないけれど、日本が一丸とならないことには、激動する東アジアの情勢に太刀打ちできませんよと訴えた。これは至極筋が通っております。そのために聖徳太子は仏教信仰を勧めたわけです。

「三宝とは仏法僧なり 即ち四生の終歸にして 萬国の極宗なり 何れの世 何れの人 この法を貴ばざらんや」。この人間のまとまりというのは、つまり連帯感というのは何によって醸成されるかと申しますと、大きく分けて二つあって、一つは先天的にあなたと私は縁がある関係というもの、一つは後天的にあなたと私の関係は築かれたということです。つまり血縁的な関係か地縁的な関係かということです。生まれる前から縁があるというのは血が繋がっている、親族、先祖を同じくしてるということです。これが血縁関係というものです。一方、地縁的な繋がり、同じ地区に住んでいる、同じ組織に属している。このいずれかしか、人間が他人とのシンパシーを共有することはできないんです。最も象徴的にその繋がりが表されているのは、先天的な繋がりでは民族です。地縁的な繋がりでは国家です。

仏教が入ってくる以前の日本の信仰では、神というのは

自らの祖先の神か、この地域の神でしかないんです。だから、天皇家も蘇我氏も、それぞれの祖先神を持っています。同じように、それぞれの地域の地の神がいます。神というのは、閉鎖的な集団の一つの中心・紐帯になる存在ということです。これを克服しないことには、日本がひとまとまりになることはできない。これに対し仏教というのは、血縁・地縁の限界をもたない、普遍的宗教です。だから仏教を受け入れようとしたわけです。

ですが、神々に対する信仰を否定してる訳ではありません。それを維持したまま、仏教信仰を共有すれば、争いもなくなるだろうというのが、厚く三宝を敬えと訴えた理由だと思います。ですからこそ、生きとし生けるもの、つまり血縁的な側でいうところの全てのものの行き着くところであって、萬国、地縁的なものの極まりだと述べるわけです。申し上げたいことは、聖徳太子が憲法十七条の中で仏教信仰を訴えられたというのは、何も聖徳太子自身が熱い仏教信仰心を持っていて、自らの命の救済あるいは精神の救済者として仏に頼れと言っているのではないということです。言うならば政治的な理由。まずは国家体制を固めなければいけない。ですからこの部分を根拠に、仏教の本質的な理解ということに絡めて、聖徳太子の事績として評価するというのは、私は少し考え直したほうがいいと思います。もちろん聖徳太子が仏教に対して人並以上の理解がなかったとは思いません。個人的に仏教の精神を人一倍よく理解し、その内容についても造詣が深かったことはまず間違いないと思います。そのことと、十七条憲法の中にこの一条を入れたということと一緒にして、聖徳太子全体の業績として評価することは、やはり考え直した方がよろしいかと思います。憲法十七条はあくまでも天皇から政治を委ねられていた皇太子、即ち、政治家としての聖徳太子が国をまとめるために言われたことだとしてご理解いただきたいということなんです。朝廷内の諸勢力の和を図ったと、これが目的です。

ところが、この聖徳太子の仏教というものは、この後一旦切断されます。上宮王家の滅亡です。聖徳太子が亡くなられてからほぼ20年後、その後継であった山背大兄王やましのおおえのおうとその一家が、蘇我入鹿によって滅亡させられるという事件が起きました。山背大兄王個人だけではなくて、聖徳太子の子孫の一族はこの時全員根絶やしにされてしまうんですね。なぜこんなことが起こったのかというと、蘇我氏が支持する押坂彦人おしさかのひこひとという敏達天皇の皇子の系統の舒明天皇こうぎよくてんのう、皇極天皇こうとくてんのう、孝徳天皇てんちてんのう。後には天智天皇もそうですけれども、その系統に対立するような立場にあった皇統が、この聖徳太子一族即ち上宮王家で、これを早く抹殺しておかないことには、蘇我氏が望むような天皇を擁立することが難しくなってくる。聖徳太子に人望があった故に、

その一族を危険視したのがこの原因だと言われています。これは入鹿の横暴であって、父親であった蘇我蝦夷そがのえみし自身もこのことに対しては批判的であった。

その2年後には、入鹿は中大兄皇子らによって討ちとられてしまう。日本書紀は確かに蘇我入鹿一人の暴挙であるという形で伝えていますが、藤氏家伝とうしかでんとか、上宮聖徳太子伝補闕記じょうぐくたいしでんほけつきというような奈良時代や平安時代の初期に成立した史料には、蘇我入鹿一人の犯行ではなく、このときに皇族の人間も上宮王家討滅軍の中に加わっていたということが明記されてます。その中には、大化元年8月の詔を出した、つまりクーデターが起こった後すぐに即位した孝徳天皇自身も、蘇我軍に加担していたと書いてるんです。私はその可能性は極めて高いと思います。なぜ聖徳太子の一族は、攻め滅ぼされなければならなかったのか。確かに、再び皇位継承を巡る争いを引き起こす可能性があることに対して、危惧の念を抱かれたこともありますけど、もう一つ大事な点は聖徳太子の一族が持っていた財産です。有力な皇族には一家を維持するのに必要な土地とか人々が朝廷から与えられましたが、それだけではなくて、聖徳太子が建立した法隆寺、それから四天王寺、ここには、かつて蘇我氏が攻め滅ぼした物部氏の持っていた財産の多くが施入されていました。四天王寺の土地と人々、法隆寺の土地と人物、それは寺の土地や所有民となっていますが、そのお寺に一番影響力持っている、実質的にそれを差配しているのは上宮王家です。つまり、蘇我氏にとって危険視するほどの経済基盤を上宮王家は持っていたということです。これを摂取しにかかったと考えれば、一旦は蘇我氏に入りますけれども、蘇我入鹿が攻め滅ぼされたことで朝廷に財産が帰属するようになります。孝徳天皇は新たに、長年の本拠である大和を離れて、摂津の難波京という新しい都を作ります。この難波京というのは交通至便のところで、当時課題となっていた東アジアの唐や朝鮮半島諸国との関係を取り持つのに大事な地点であったということもあります。が、何よりも分散していた経済基盤が一元化されて朝廷に入ってきたことによって、難波遷都が可能になったのではないかと。

クーデターが起こったちょうど2ヶ月後、即位したばかりの孝徳天皇が、おそらく飛鳥寺の庭に近隣のお坊さんや尼さんを全員集めて、詔を述べさせた。その詔の内容がこれです。(スライド「癸卯、遣使於大寺、喚聚僧尼而詔曰。」「於磯城嶋宮御宇天皇十三年中、百濟明王、奉傳佛法於我大倭。是時、群臣俱不欲傳、而蘇我稻目宿禰、獨信其法。天皇乃詔稻目宿禰、使奉其法。於譯語田宮御宇天皇之世、蘇我馬子宿禰、追遵考父之風、猶重能仁世之教。而餘臣不信、此典幾亡。天皇、詔馬子宿禰而使奉其法。於小墾田宮御宇天皇之世、馬子宿禰、奉爲天皇造丈六繡像・丈六銅像、

顯揚佛教、恭敬僧尼。朕、更復思崇正教光啓大猷。）」

時間の関係で簡単に申しますが、^{きんめいてんのう}欽明天皇の時に仏教が伝わった。その後、^{そがのいなめ}蘇我稲目がただ一人それを信奉した。敏達天皇は、蘇我馬子に命じて仏教を重んじさせた。推古天皇のために、蘇我馬子は「丈六の繡像と銅像」を作った。このような経緯を踏まえて、「朕」即ち孝徳天皇は、「正教」即ち仏教を崇めようと思う。よって狛大法師以下十人のお坊さんを十師に任命するとともに、お寺の造営と維持に対する助成を訴えた。これが大化元年八月の詔です。つまり、蘇我氏が滅亡して新たに即位した孝徳天皇が最初に出した詔がこれなんです。これを見て、皆さんはどのようにお感じになりますか。ものすごく違和感がありませんか。

この中に厩戸王の一文も出てこないということには、二つ可能性がありまして、日本書紀が何らかの事実を反映して記事を残したとしたら、一つの可能性としては、この時点で全く聖徳太子は注目には値しない人物と評価されていたか、もう一つは、意図的に聖徳太子の功績が抹殺されたか、ということです。常識的には、国賊として攻め滅ぼされた蘇我氏の人間の業績を顕彰するような詔は、違和感があります。おそらくは、聖徳太子の事績は意図的に抹消されたのではないかと。なぜかと言えば、先程申しましたように、聖徳太子の一族、上宮王家の滅亡には、実はもう一方の皇統である、押坂彦人王系の皇族が積極的に蘇我氏と結んでやったことであって、日本書紀が編纂された段階の^{げんめいてんのう}元明天皇、^{げんしょうてんのう}元正天皇、あるいはその親の世代の天智天皇、天武天皇、全てこの皇統で天皇が受け継がれているからです。それが、自分たちの正当なることを後世に伝えるという政治的目的を濃厚にして作られた日本書紀に、上宮王家の聖徳太子の功績を褒め称えるようなことを記すのは、自分の祖先が起こしたと矛盾することになってしまいます。だから、あえてこういう形にしたのではないかとということです。



上宮王家・聖徳太子の建てた法隆寺は存続していますが、8世紀の半ばぐらいに至るまでほとんど見る影もない。日本書紀にはこの後、法隆寺が焼けたという記事しか見えません。続日本紀という日本書紀に次ぐ正史も、天平年間に至るまで、ほとんど登場いたしません。当時の日本の国家の歴史を物語る上で、四天王寺、法隆寺という寺院にさほ

ど価値が置かれていなかったことは明白です。正史では意図的にそのように扱われた訳です。

○国家仏教の萌芽

東アジア情勢が目まぐるしく動いて、高句麗・百済と唐・新羅という二つの対立軸ができたのが、孝徳天皇の頃であったわけです。唐・新羅に連携するか、高句麗・百済に連携するかで、朝廷の中の意見も対立したようです。唐・新羅に与するということを訴えたのが孝徳天皇で、それに対して従来からの百済との友好関係を踏まえ、百済・高句麗の方に与するべきとしたのが皇太子・中大兄皇子で、結局、そのお母さんであった皇極太上天皇、妹で孝徳天皇の皇后であった^{はしうとこうこう}間人皇后など、大半の人間を引き連れ、孝徳天皇だけを難波宮に残して大和へ戻ってしまうということが起こります。

失意のうちに孝徳天皇は難波宮で最後を迎えることになりますが、結局その後、唐・新羅の連合軍が百済を攻め込んで、西暦660年に百済は滅ぼされます。百済の王子であった^{ほうしょう}豊璋という人物が人質のような意味合いで日本に居ましたが、その豊璋を半島に戻して、再び百済の王朝を復活させようという動きが起こり、倭が援軍を差し向けますが、大勢の水軍が大敗を期するのが白村江の戦いという西暦663年の海戦です。この軍事行動を起こす過程で、孝徳天皇の後を継いで再び天皇になっていた^{さいめいてんのう}斉明天皇も亡くなってしまう。本来ならば皇太子であった中大兄皇子がすぐ天皇になっても然るべきだったんですが、何故か中大兄皇子はそのあと正式には即位せずに、皇太子のまま天皇の政治を代行する皇太子称制を行います。その時に、北九州に防人が置かれたり、朝鮮式山城が築かれたりというような、防御措置が施されて、^{おうみおおつのみや}挙げ句の果てには、近江大津宮へ遷都する。

高句麗も、結局西暦668年に攻め滅ぼされますが、この朝鮮半島全域を支配しようとする新羅と唐が対立することになりまして、日本にその影響が及ぶことはなかったんですが、危機感が著しく高揚しました。ちょうどその頃に、仏教の理念でもって国を守るという思想が高まります。仏教の經典の中には、国王が熱心に仏教を大事にすれば必ず四天王と呼ばれる毘沙門天をはじめとする四天王が国土を守る、ということを書いた經典がありますので、その教義に基づいて呪術的に何とか国難を免れようというような動きが出てきたというのが、国家仏教の萌芽です。その頃から、個々の經典の内容に対する関心が高まり、やがて壬申の乱という大きな内乱を経て天武天皇が即位し、中央集権国家体制の樹立が目指されるようになりますと、積極的にお経を制作して頒布し、全国で仏事が催されます。お経の中でも特に、金光明経、仁王経という、護国の思想を具体的に説いたお経を利用することで、国をまとめようとしたとい

さんで、この僧を庇護したのが光明皇后でした。玄昉は、^{けんそう}中国の皇帝・玄宗に重用され、帰国する時に当時の中国に所在した仏教の經典のほぼ全てを与えられて戻りました。そのお経は、光明皇后の意向によりまして、藤原氏の氏寺であります興福寺に置かれ、その經典の大規模な写経が始まります。光明皇后は夫であった聖武天皇に、このような国難は仏教の力に頼って乗り切らねばならないと進言し、^{こんこうみょうしてんのうごこくのてら}天皇のための僧寺、金光明四天王護國之寺とともに、^{ほっけめつざいのてら}尼寺である法華滅罪之寺が設けられた。まるで聖武天皇と光明皇后のありようをあからさまにしているような、そういう印象を受ける国分寺・国分尼寺の建立で、国分寺には七重塔という大規模な塔を建て、その中に聖武天皇宸筆の最勝王経が置かれた。ということは、国ごとに置かれた国分寺というのは、まさしく天皇そのもののシンボルでもあるということです。寺院には、かつての古墳に代わる存在として、造立した権力者のステータスを周知させるという意味があったんですけども、各地に豪壮な伽藍を持つ寺院が建てられたということは、同時に、中央にいます天皇、王権の象徴でもありました。こういう形で王権の危機を何とか脱しようとされたということなんです。

○大仏建立

そして大仏造立です。もともと近江信樂で企画されたもので、光明皇后がお産みになった男の子（^{もといおう}基王）の菩提を弔うために作られた金鐘寺と、その娘であった^{こうけんてんのう}孝謙天皇（阿倍内親王）が皇太子になった時に建てられたと言われる福寿寺を合体したような形で大和国金光明寺とされ、これがやがて東大寺になります。この経緯からしてもわかるように、きっかけは光明皇后です。

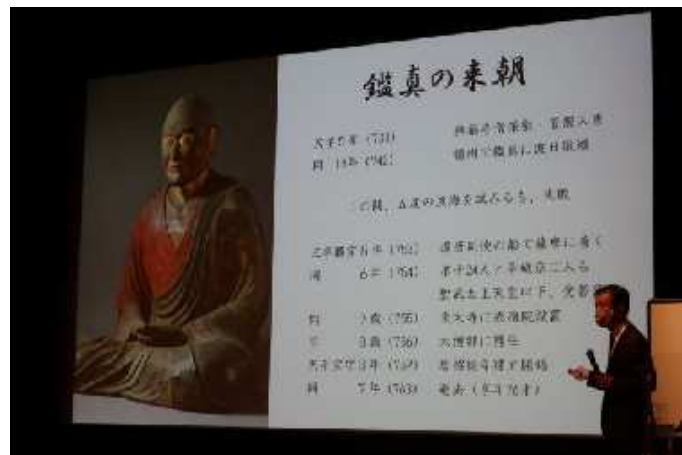
光明皇后と玄昉は、西暦740年、天平12年に聖武天皇が難波行幸をされた時に、自分のふるさとである安宿郡とか大県郡へ彼を誘います。ここには古くから渡来人が独自の仏教信仰に基づいてたくさんのお寺を建てて、宗教都市のような様相を呈していました。そこで聖武天皇が智識寺というお寺の本尊である^{るしゃなぶつ}盧舎那仏を拝まれて発願されたのが、^{るしゃなだいぶつ}盧舎那大仏というわけです。つまり、河内にゆかりの深い光明皇后や玄昉が、聖武天皇にこういう事業を決意せしめたんだろうと思います。

この当時、日本では全く金は取れませんでした。749年に、陸奥国小田郡という現在の宮城県北部涌谷町というところで金が出るまで、日本で全く金は出なかった。大仏に塗る金が無くて困っている時に金が出たということは、日本の神々も大仏造立の事業を支援しているに違いないということで、聖武天皇は喜んで大仏にこのことを報告しました。

ところがこの時、天皇は皇族や百官を率いて大仏に北面しました。天皇は常に南面する存在です。北を向く天皇な

んて有り得ませんが、結果的に北面して、自分は「三宝の奴」、つまり仏教の僕であると自称します。その上、聖武天皇は男の天皇として初めて生前退位します。天皇というのは基本的には終身制ですが、聖武天皇は退位して出家したのです。この頃、聖武天皇は体が弱ってきて、毎年のように病をされている。このままでは自分の寿命を保つことはできない。仏教の經典に説かれた理想的な国王として^{てんりんしょうおう}転輪聖王というのが出てきます。だんだんと年を取り体が衰えてくると、^{こんりんしょうおう}金輪聖王のシンボルである金輪宝という宝のマークの影が薄くなっていく。そうしたら、時が来たことを悟って、位を退いて仏門に入ります。おそらく聖武天皇はそれを実践された。彼の行為は全く金輪聖王の足跡と同じです。退位を表明して、出家して^{だじょうてんのうしやみしょうまん}仏道に入ることです。そして、^{こうけんてんのう}太上天皇沙弥勝満と名乗ります。その譲位を受けて、娘である孝謙天皇、古代最後の女帝が即位することになります。

大仏開眼供養というのは、「仏法東帰より、齋会の儀未だかつてかくの如く盛りなるはあらず」と言われるように、ものすごい盛大に催されました。そのすぐ後にやってくるのが、^{がんじん}鑑真です。



○鑑真の来朝

鑑真は、正しい戒律を伝えた僧、唐招提寺の祖と言われた方と受け止められている人が多いですが、もう一つ大事なことがあり、この人が天台宗関係の^{まかしかん}摩訶止観などの書籍を日本に請来しました。その鑑真の流れを汲むのが、最澄です。だから鑑真が来なければ、最澄が世に出たかどうかわからない。鑑真と一緒にやってきた法進という僧や、鑑真より一足先にやってきた道璿という僧が、天台の教義を伝えた。それを受け継ぐような形で、行表という僧を通じて最澄が登場します。

最澄の足跡を辿る前に、当時の情勢に触れておきます。孝謙天皇は位を淳仁天皇に譲って譲位した^{どうきょう}後、病気になる時に出家して尼となります。その師が^{ふじわらのなかまろ}道鏡という僧でした。やがて彼女が藤原仲麻呂と対立し、^{えみのおしかつ}恵美押勝の乱という武力衝突に発展しまして、仲麻呂は敗死します。勝利した孝謙上皇は、還俗せず、尼の身分のまま、再び天皇

の位に就いた。歴代の天皇の中で、即位した時から崩御するまで出家者の身分であったというのは、彼女だけです。そして、出家者である自分が天皇である以上は、出家者である大臣がいってもおかしくないということで、道鏡を大臣に据えた。道鏡は法皇という地位に昇り、結局次の天皇にということまで考えられるに至りますが、これはさすがに周囲の合意が得られず、道鏡の即位は妨げられます。道鏡を次の天皇にというのは、^{しょうとくてんのう}称徳天皇の考えであったと思います。それは、法脈相承ということです。仏教では当然、師事相承と言って弟子が後を継ぎます。結局それは受け入れられませんでした。

称徳天皇が亡くなって後継ぎがない。そこで擁立されたのが光仁天皇という天智天皇の孫に当たる人物でした。^{いのえなしいしんのう}光仁天皇の皇后が井上内親王という聖武天皇の娘で、井上内親王との間に産まれた他戸親王という人が次の天皇になれば、一旦傍系に振られるけれども再び天武天皇の皇統に戻ることになりますが、井上内親王という人は夫である光仁天皇を呪い殺そうとしたということで皇后の地位を剥奪されてしまい、他戸親王も皇太子の地位を剥奪されます。大和の宇治郡というところに幽閉され、ある日突然親子同時に死ぬ。井上内親王と他戸親王が排斥されたことによって、皇位が転がり込んできたのが^{かんむてんのう}桓武天皇でした。

桓武天皇は最初、改革志向に燃えて、造東大寺司や造法華寺司を廃止するなど、仏教に対して統制を強化するという形で政治を行います。怨霊に憑りつかれる。皇太子の頃は井上内親王、天皇になってからは、長岡遷都の翌年に藤原種継暗殺事件という長岡遷都に反対する人々によって引き起こされた事件があって、そのときに首謀者として捕えられて死に至らしめられたのが皇太弟・^{さわらしんのう}早良親王。この早良親王の怨霊が結局収まらずに、桓武天皇は呪い殺されます。

最澄が世に出たのは、延暦16年に十禅師に任命されたことによって、つまり桓武天皇から召されて12年の籠山を解いて山を降ります。最澄が任命された十禅師というポストは、実は天皇の病を治す、つまり玉体護持を図る役割を帯びた僧職でした。長年の山林修行等によってそれなりの技術を培っていた最澄が、桓武天皇の認識を得るに至った。ところが最澄は、病を癒す技術だけでなく天台宗の教義に対して造詣が深く、天皇の信用を厚くすると、唐の天台山に赴き、最終的に日本に天台宗を打ち立てるに至ります。最澄はそれまでの先例になかった「特定の宗派ごとに2人ずつの年分度者」を、桓武天皇に奏請して認めさせます。延暦25年、桓武天皇が亡くなる直前に天台宗に対して年分度者が与えられ、最澄はこのような経緯で、聖徳太子以来の国家と仏教の関わりの中で生まれてきたということをお知りおき頂ければ宜しいかと思います。

もう一つ、最後に改めて申し上げます。先ほど私は、日本仏教の礎を築いた人物を一人挙げよと言われれば、間違いなく光明皇后と申しました。この光明皇后が、法隆寺にひとかたならぬ肩入れをして、聖徳太子がかつて住まいしていた斑鳩宮の跡地に、新たに伽藍を設けられた。その中心となる建物が夢殿です。本尊の救世観音は、聖徳太子のお姿を写したと言われています。光明皇后が自らの法華経に対する信仰により、かつてこの法華経を推古天皇に講説したと言われる聖徳太子を顕彰して、法隆寺を官寺の列に加え、自分自身の理想に近い体制を築かれた。ですからこの光明皇后の行動がなければ、果たして、聖徳太子も現在我々がイメージするように復権されたかどうかともわかりませんし、先ほど申し上げたように、最澄に繋がるラインもそこから生まれてきたということをご理解いただければというふうに思います。



桓武天皇関係系図

※印は失脚等によって姿を消した人物を示す。桓武の時代環境の厳しさがよくわかる。数字は皇統譜の代数。

※ 井上満郎／著『人のあるく 桓武天皇と平安京』著者 井上満郎 (吉川弘文館、2013年) から抜粋



〇はじめに

2022年は聖徳太子が亡くなったと言われている年から1400年目、そして伝教大師最澄が亡くなられてから1200年目ということで、聖徳太子と最澄はちょうど200年間隔を開けて亡くなったということになるんです。

前回、日本仏教の礎を築いた祖と言われている聖徳太子から、実質上、今の日本仏教の一番の台頭、比叡山延暦寺を開かれた最澄までの過程を辿ってお話させていただいたんですけども、今回の講演では、最澄と空海という京都にも縁の深い2人の高僧を取り上げて、その足跡を辿りながら、この2人がどういう違いがあったのかということもお聞きいただければと思っております。

最澄は早くから桓武天皇に重用され、高い位に就かれていた。それに対して空海は、桓武天皇の三代後の淳和天皇という方が、かなり空海を大事にされる。そういうお二方の違いも含めながらその足跡を辿っていきたいと思います。

〇最澄の経歴

最澄が生まれた766年あたりは奈良時代の半ば、天平神護とか神護景雲という、日本で4文字の年号が使われた最後の段階です。令和、平成、昭和というように、日本では「大化」以来、伝統的に2文字の年号が使われてきた歴史があるんですけども、4文字の年号が使われたのが、西暦で申しますと749年から770年までの21年間です。

この4文字年号を日本が使った時代というのは、当時、朝廷で天皇さん以上の強い力をお持ちであった光明皇后という方と、その光明皇后が御産みになった最後の古代の女帝、称徳天皇、母娘の時代です。ですから、光明皇后と阿部内親王と言われた孝謙天皇のために設えられた4文字年号と言っても過言ではない。その日本の最後の女帝である称徳天皇の時代に、最澄は生まれられた。

出身は、今の比叡山坂本から比叡山の方へ歩いていきますと、生源寺という最澄が生まれたと言い伝えられるお寺があります。お父さんが三津首百枝。お母さんは藤原氏の女性。幼名を広野と言う。三津っていうのは、三つの港と

いう意味ですから、今の天津とか或いは坂本などに、当時の水上交通と陸上交通の交わる拠点があった辺りを管轄していた豪族で、しかも首という姓を持っておりますから明らかに渡来系です。

琵琶湖の周辺には、たくさんの渡来人が住み着いていた。渡来系の氏族が多いということは、生産性の高い、高度な先進文化が進んでいた地域だったということです。琵琶湖周辺の水域を整えて、河川等を整備して耕地に持っていったということに大きな意味があり、近江は古代で言うと大国という扱いでした。

交通という輸送手段についても、渡来人の果たす役割は非常に大きい。最澄の生まれた近江の国滋賀郡大友郷とか、この辺りの三津首がいた坂本のあたりというのは、北方から琵琶湖水運を使って運んできた船を港につけて、ここで物資を陸上に上げて当時の朝廷に持ってきた、交通の要衝であったわけです。そういうところには当然のことながら、運送のシステムが整っています。最澄が開かれた比叡山延暦寺は、平安時代になりますと全国各地に広大な荘園を持つ大荘園領主になりますから、比叡山の元へ送られてくる荘園の年貢とかいろんなものが集積される地域ですから、中世になってもこの近江の坂本というところには交通機関が発達していた。もう今は閑静な場所になってますけども、ここで最澄がお生まれになった。

最澄は幼い頃から「小学」というところに通って教育を受けたと伝記の中で出てくるんですけど、これが実は資料としては非常に珍しい。大学は、貴族の子供たちを教育する場として国が正式に設けた教育機関で、資料にも残ってますし大体どんなものかわかる。地方には国学と言って、地方の豪族である郡司の子弟を養成する機関もあったんですけど、もっと幼い世代をどう教育していたのかというのは全く資料がないんです。ただ一般の農民も通っていたとは考えられませんか、これも渡来系氏族ならではの、自分たちの子弟を育成するような機関を持っていたということがわかるわけです。日本の古代においては唯一の資料です。

14歳になった頃に、近江の国分寺僧に出家された。その出家したときのお師匠さんが行表という奈良の興福寺のお坊さんで、ちょうど最澄が出家された頃は、近江の崇福寺という比叡山の東の麓にあったお寺に入られていた。近江の大国司ということですから、近江の国の中で一番偉いお坊さんだったわけです。

延暦4年、785年に東大寺で受戒されます。戒律というのは正式の国家免許ですから、これを行うのは中央では東大寺、関東では下野の薬師寺、西国では九州の筑紫の観世音寺、この三つでしか戒律は受けられない。東大寺で受戒された後、本来ならば自分の所属する近江の国分寺へ入るべきであったんですけども、何かきっかけがあって、最澄は自分の故郷の実家の裏山と言ってもいい比叡山に入られ、そこで修行と教学の研鑽に励まれたということになるわけです。その間に、文殊堂と薬師堂と経蔵、三つの建物からなる一乗止観院を建てられた。

最澄が公の立場を得られるのは、国が定めた天皇の玉体を保持する役割を帯びたお坊さんである十禅師の一人に任命されたことで比叡山を下る。785年に入られて797年に比叡山を下られた。なぜこのように下られることになったのかと言うと、桓武天皇から自分の体の保護をして欲しいという要請がきっかけだということです。

○天台宗の流伝

天台宗の正式な名称は天台法華宗で、根本経典は法華経です。日本の仏教で象徴的に一番多く用いられてるお経は、間違いなく法華経です。この法華経を中心とするところの教義体系を確立されたのが天台智顗という中国の僧です。この天台智顗が師と仰がれたのが、当時高僧で知られた南岳慧思という方。聖徳太子はこの南岳慧思の生まれ変わりだと言われたが生まれ変わりはありえない。なぜかと言うと南岳慧思が亡くなられた577年には、すでに聖徳太子が誕生している。ちなみに、天台智顗の生まれ変わりと言われたのが最澄です。

時代は下りまして、このお二方からほぼ150年経った8世紀の半ば頃、有名な栄叡と普照という2人のお坊さんにより、日本に戒律の制度を整えるために遣わされたのが道璿という唐僧です。そして禅・華嚴を伝え、さらに天台教学にも非常に精通していた。その道璿の教えを受けたのが先ほどの行表という人ですから、そういう意味では道璿は伝教大師のお師匠さんのお師匠さんになる。

そして遅れて鑑真がやって参ります。栄叡らの要請によって何度も渡海を試みられますがことごとく失敗して、最後は失明されてまでも日本に来られた。753年、東大寺の大仏開眼供養が行われた翌年ということになります。

鑑真の経典が、弟子・法進という人によって、東大寺の唐禅院に収蔵された。このちょうど同じ頃に、最澄は東大寺で受戒した。東大寺で縁があり、鑑真が請来した天台宗関係の教典、摩訶止観とか法華玄義などの仏典に触れたことがきっかけで、天台宗の教学にのめり込まれていったわけです。

先ほどご紹介しました行表という方がいた崇福寺は、どこにあるのか。西大津と唐崎の間、この南滋賀の辺りに、

西郡という皇子山のすぐ北のところに、天智天皇が近江大津宮を作られたときに、不思議な体験をされてお寺を建てられたという言い伝えがあるのが崇福寺というお寺。だから崇福寺は天智天皇が建立に関わる寺だということですね。これは申すまでもなく比叡山の一角ですから、比叡山に籠山されていた最澄も、おそらくこの崇福寺あたりには出入りされて、ここでまた新たに崇福寺に所蔵されているお経から、さらにその勉強を究められたということは十分考えられる訳です。



※グーグルマップを引用

実は比叡山というと、伝教大師が自らそこにお入りになって、新たにそこを仏教の聖地として開かれたというふうにお考えの人が多いんですけども、最澄がお生まれになるずっと前から神の山として崇められていた。懐風藻という日本で最初の漢詩集に出ております、この1首でございまして、懐風藻ができた頃の近江の守である藤原仲麻呂が、亡き父親である藤原武智麻呂を偲んでいる歌ですけども、この歌の中に「近江はこれ帝里 稗叡は寔に神山 山静けくして俗塵しすみ 谷しすけくして真理専らにあり ああうるはしき我が先考 独り悟りて芳縁を開く」 私のお父さんがここで芳縁を開かれたんだと。「宝殿空に臨みて構へ梵鐘風に入りて伝ふ」つまり藤原仲麻呂の時代ですから、最澄よりも一世代前の段階で比叡山にはお寺があったんです。要は、こういう宗教的な環境がすでに整っているところに最澄は入られた。全く何もない自然そのものの、そういうところを新たに開いたということではない、ということをご承知おきいただければいいのではないかと思います。

100パーセント確証あるわけじゃないんですけど、この崇福寺の一角に出ている辺りは、崇福寺に隣接して、桓武天皇が建てられたと言われてる梵釈寺であろうというふうに考えられています。梵釈寺というお寺は、延暦5年ということですから、長岡京へ遷都された2年後、桓武天皇の勅願によって作られたお寺です。

なぜ桓武天皇は、奈良のお寺を移さなかったのか。桓武天皇からすると奈良のお寺は全部、旧皇統のお寺です。自分が克服すべき前の王朝が建てたお寺なので、持ってくるはずがありません。必要なら自分が建てると。実際には平安京になって、そういうお寺を造られている。あまり有名ではありませんけども、「常住寺」常に住む寺という。桓武天皇が造られて、そこからお坊さんを読んできて必要に応

じて管理をさせられていた。常住寺は、今の北野天満宮のすぐ西側にあったお寺です。桓武天皇のお住まいから目と鼻の先ですから、常にお坊さんがやってきて、桓武天皇の看病を行ったり、皇太子である安殿親王の看病を行ったり、そういうお寺があった。

同じように梵釈寺を建てられた。山間に建てられたということは何を重視されたかということ、優れた法力を持った、つまり病を治す、災害を鎮める、そういう摩訶不思議な力を持ったお坊さんが、自らが修行するための環境の手配として、梵釈寺を造られた。梵釈寺には独自の十禅師を置いて彼等に運営させた。なぜ梵釈寺がここに建てられたかというと、このすぐ北側にあった崇福寺と密接な関係があって、崇福寺は、天智天皇の勅願です。天智天皇こそは桓武天皇からしたら、我が皇統の祖である。自分の曾祖父であると同時に、私の天皇家は天智天皇から始まるということで、このお寺をすごく大事にされる。そこに、隣接する形で、自身の梵釈寺というのを建てられたということなんです。梵天・帝釈天、この名前から取っているわけです。守護神ということですよ。

○早良親王の霊障

長岡遷都を行った翌年、長岡京造営の最高責任者であり、桓武天皇の側近で一番信頼を得た藤原種継ふじわらのたねつぐという人が、遷都に反対する勢力によって殺されます。瞬く間に犯人が挙げられて、朝廷の要人の多くが排斥されることになった。これが、785年に起こった藤原種継暗殺事件。その暗殺事件の首謀者として、ご本人は無実であるはずと訴え続けたが聞き入れられず、淡路島に送られて死んでしまったといわれるのが、桓武天皇の実の弟、早良親王さわらしんのうこの人だったという訳です。

早良親王はかつて東大寺のお坊さんであった。東大寺のお坊さんということは、桓武天皇が退けられようとした南都の仏教勢力と非常に懇意なんです。何かがあったときにやっぱり障害になる可能性がある。そういうこともあって、早良親王から皇太子を剥奪して淡路島に送ろうとしたんですけども、本人は絶対無実だと言って反乱騒ぎを起こして死んでしまわれたんですけど、ひょっとしたら本人の意思で自死を選んだという体裁にしてるだけで、本当は水も食べ物も一切与えられなかったかもわかりません。乙訓寺に一旦幽閉されて、そのあと淡路島に送られる際に亡くなってしまったというわけです。

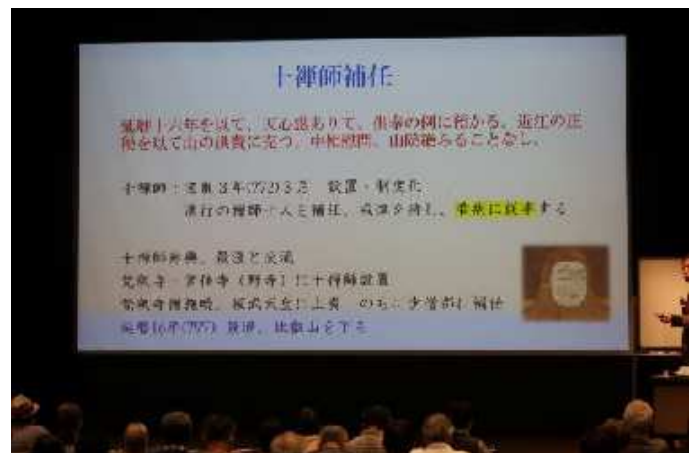
死んでもそれは許されずに、その遺骸が淡路島に送られて葬られますが、その早良親王が祟りをもたらすということになるわけです。桓武天皇の身内が相次いで死んでいたり、早良親王に変わって皇太子になった安殿親王が不治の病になったりした。これは明らかに早良親王の怨霊であるということが判明し、御祈祷を読まれたりとか、或いは

墓守が新たに設けられたとか墓回りが整備されたりとかいろんなことやるんですけども、早良の怨霊は収まらなかった。長岡京が10年で捨てられた一番大きな要因は早良の祟りだろうと。長岡京に残っていても呪い殺されるという恐怖観念があって、新しい都の地として平安京にやってきたんだらうと、当然そう考えるわけです。

等定とうじょうとか施暁せきぎょうとか善珠ぜんしゅというお坊さんは、早良の怨霊を鎮める役割で桓武天皇に近侍するようになったと言われている。等定というのは東大寺のお坊さんで早良親王のお師さんだった人です。施暁という人は梵釈寺のお坊さんで桓武天皇にも意見することができた。善珠というのは興福寺のお坊さんですけど、この人は唯一、早良親王の怨霊を抑える能力を持っていた人だと明記されてる。そういう怨霊鎮めの術に長けた人を、側近として重用されたということになるわけです。

興福寺僧善珠は早良親王の精霊の信仰によって、その怨霊を鎮める唯一の人物と言われたんですけども、延暦16年に亡くなってしまいます。大事なことは、延暦16年、長岡遷都の3年後、最澄が十禅師に任命されて比叡山を下った年です。つまり最澄は善珠の代わりと私は考えてます。唯一、桓武天皇が早良親王の霊障から自分を救ってもらった頼みの綱としていた善珠が死んだ。誰か代わりにそれだけの高学高德の法力を携えたお坊さんでないと自分の身がもたない。そこで、等定とか施暁、特に施暁は梵釈寺の十禅師でしたから、その頃から最澄のことをよく知る彼らの推薦により、桓武天皇から勅命が下って、最澄が十禅師に任命されて12年で比叡山を下りたということになるだろうかと。そうすると、話の辻褄が合ってくるわけですね。

それで十禅師に補任されます。「延暦16年を以て、天心得ありて、供奉の例に預かる。近江の正税を以て山の供奉に充つ。中使慰問、山院絶ふることなし。」こういう十禅師というポストに付けられ、近江の国の正税で比叡山の運営費用を援助してもらうようになったということで、延暦寺はこれから大きくなる訳です。十禅師、こういう戒律を持って、看病に従事するというお坊さんを10人選んで、必要に応じて天皇がお傍に召して看病に当たらせてというこ



とになります。梵釈寺・常住寺に十禅師が置かれたんですけど、梵釈寺の僧施暁が桓武天皇に上奏して、最澄を推薦したのではないかと考えてございます。

○天台宗の宣揚

延暦 20 年には比叡山に南都の 10 人の高僧を招いて、霜月会法華經の講演をされた。南都の十大徳ということで、もちろん天皇の御心がなければ、これだけの偉いお坊さんを集めることはできません。翌年には、和氣弘世わけのひろよと真綱によりまして、南都の 14 人の高僧を招いて、和氣氏の氏寺である高雄山寺、今の神護寺で天台宗の宗旨を講演した。こういう大きな法会を開いた背景には、南都の平城京では興福寺や元興寺等を拠点とする法相宗と、大安寺を拠点とする三論宗のお坊さんが相争っていたわけです。教義上の対立、或いは朝廷にどちらが用いられるかという対立があって、両方ともに仲良く国家のために奉仕しろというのが桓武天皇のご意向でしたから、そういう意味合いがあって、最澄にその仲裁に入らせるというか、そういう目的もあって法会が営まれたと、それだけ最澄というのは桓武天皇の全幅の信任を得ていたということになります。

その最澄が桓武天皇に願ひ出て、入唐求法の旅に出ます。延暦 23 年、遣唐使に随行して入唐した。最澄は留学生ではなくて、還学生かんがくしょうという身分で行くんです。これは初めて最澄にそういう身分が設定されるんですけど、それまでは遣唐使に随行したお坊さんは最低でも 10 年間は唐に留まって、仏教の教義を学んで帰ってくるのが普通だった。ところが還学生は何年も留まるのではなく、遣唐使に従ってそのまま帰ってくる、こういうお坊さんであった。正式に国司として行った一行に随行して帰ってくる。だから時間がないから、最澄はここで国司の一行と別れるんです。



明州というところに上陸して、最初は天台山に向かって、天台宗の教義を台州の龍興寺で道邃どうすい、天台山の仏隴寺ぶつろうじで行満ぎょうまんから受学した後、戻ってきた。その後、まだ時間が

あるということで越州という所に行って、順暁じゅんぎょうというお坊さんから密教も授かって帰ってきた。こういう行程を辿ったということです。

何でそういう還学生であったのか。もちろん比叡山延暦寺の運営に当たらなければならないので時間的余裕がなかったのもあるんですけども、やっぱり桓武天皇が最澄に一番期待しているのは自分の玉体護持ですから、10 年間も唐に行かれたら自分が死んでしまうと。そういう理由もあったんだろと考えられるわけです。

最澄が帰ってきたら、案の定、桓武天皇は不予でした。早良親王の怨霊のせいということで様々な手立てが講じられたが治まりません。最澄も早速召されて、殿上にて悔過・読經びるしゃなほうを行い、或いは内裏にて毘盧遮那法という修法で、当時こういう病気の平癒に一番効果があるのは密教だと信じられておりましたから、最澄は本来、天台宗の教えを高め広めるために行ったんですけども、彼に期待されたのは、むしろ医学的に学んでいた順暁から受け継いできた密教の手法を用いて、何とか自分の命を救えとやらされるんですが、結局、桓武天皇は翌年死んでしまいます。やっぱり最澄は遅かったわけです。桓武天皇の死後、正史である日本後記に残されているということは、明らかに桓武天皇は弟（早良親王）に呪い殺されているということになる。

そのときに最澄は、「沙門最澄もうす。最澄聞く、一目の羅は鳥を得ることあたはずと。」目が一つしかないような網であつたら鳥を捌うこともできないということで。こういう彼なりの理屈を立てて、天台法華宗に 2 人、年分度者を設定して欲しいと。年分度者というのは、1 年間に 10 人だけ、正式な得度が認められた。10 人というのは候補者の中から試験を行って、その試験に通った者にお坊さんの資格を与えるとなつてたんですけど、しかし、派閥争いが起こって、藤原氏の関係の深い興福寺の法相宗のお坊さんが、優先的に全部この年分度者の枠を占めてしまう。最澄が言ったのは、いずれの宗も廃れさせない、争いは駄目だという桓武天皇のご意向に沿うように、宗ごとに何人という定員を定めるということ。等しく、それぞれの宗から得度を許す、こういうシステムにしないよということを桓武天皇に申し上げて、桓武天皇は勅許されるんです。これが日本における宗派の起源です。

我々がイメージするところの宗というものは、実際は存在しましたが公認されていませんでしたが、これによって公認されることになるわけです。ある拠点寺院を中心に、同じ教学を研鑽する人が集まるという、こういう宗の起源というのを言い出したのは最澄だったというのが非常に面白いところなんです。

○空海の経歴

空海の故郷は、讃岐国多度郡弘田郷という、現在、善通

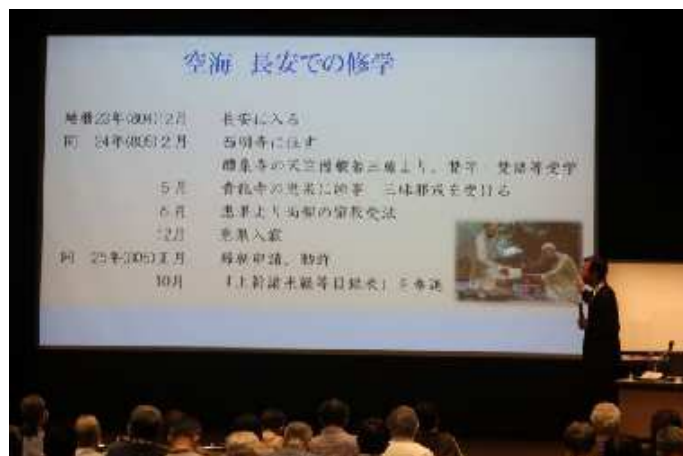
寺があるところです。お父さんは佐伯田公さえきのたぎみという人で、お母さんは阿刀氏の出身。幼名は佐伯真魚さえきのまお。

延暦7年に外舅・阿刀大足あのおおたりという人が、桓武天皇が非常にかわいがっていたお子さんである伊予親王いよしんのうという人の侍講、要するに教育係だった。14歳の時にその母方のおじさんを頼って上京された。おそらく卓抜した頭を持っていた空海は、明経道の学生として大学入学もされた。これは、まったく異例の入学なんです。どういう経緯で、空海・佐伯真魚という人が、明経道の学生として大学に入れたのかよくわかっていないんですが、なぜかという、大学というのは五位以上の貴族の子弟しか入れない。五位というのは貴族ですから、その教育機関が大学です。逆にいうとそれだけ卓抜したものを持っていたんでしょう。氏素性にとられない、本当に優秀な人を登用するという桓武天皇の方針が残っていたかもしれません。

特例的に入学されたのですが、大学で専攻された明経道という儒教の教え、これに飽き足りず、その2年後には、自分の生まれ故郷である南海道を遍歴されます。山林修行、これが四国88ヶ所の起りです。その間に、1人のお坊さんこくそうぐもんじほうから虚空蔵求聞持宝というのを受け継がれた。これはなかなか便利な修法で、虚空蔵菩薩の真言を一日100万回唱えるわけです。それを毎日毎日続けていたら、絶対に一回聞いたら忘れない記憶力が得られるのが、虚空蔵求聞持宝。

京へ戻られてから、聾瞽指帰ろうこしいきというんですけど、これ後には三教指帰さんこうしきという名前に変わるんですが、聾瞽指帰を著された。儒教と仏教と道教の中で、仏教が一番優れた教えであると書かれた。

この頃に仏門に帰依されるようになって、それから7年後、遣唐使に付随して留学生として派遣される直前のころに出家した。どういう経緯で出家されたのか残念ながら分からない。遣唐使に従って入唐し、唐の都・長安に行ったところからしかわかりません。



最澄とは違い船に乗り、予想外のところに到着したんですけど、何とか唐の都・長安にたどり着いた。長安に入っ

て最初、西明寺に住した。西明寺に住しながら、醴泉寺の天竺の僧、インドからやってきたお坊さんの般若三蔵はんによさんぞうという人から、梵字・サンスクリットを教わった。これは非常に強みで、翻訳したものではなく仏教の原典を読める。十分その知識に精通した後、当時中国密教における第一人者であった清龍寺の恵果けいがに師事して、三昧耶戒さんまやかいという密教の受戒を受けた。恵果は空海の顔を見た途端に、私が待ち望んでいた人物だと全幅の信頼を置いて、自分の持っているありとあらゆる密教の知識と修法を空海に伝えた。そして、恵果は伝えることを伝えたら死んでしまう。

留学生は最低10年はいるべきなんですが、空海は2年で帰ってきてしまう。入唐留学生としてはアウトです。おそらくそのことが理由になって、帰ってきてから都に戻ることは許されず、九州・筑紫の観世音寺に滞在して、畿内に戻ってから岸和田の方の槇尾山施福寺で過ごされて、ようやく帰ってくるということですから、留学僧としてはイレギュラーなキャリアであったことになります。

恵果から授かった様々な密教の文物、上新請来経等じょうしんしょうらいきょうら目録表、新たに請来した経等の目録を上るの表、これだけの物を自分は持って帰ってきたと。おそらくその大半は、まだ当時の日本には伝わっていなかった密教の様々な經典、或いは曼荼羅の絵など、私はこれだけの新しい密教の教えを持って帰ってきましたから、何とかこれで許してほしいと訴えたんですが、その目録みたいなものが朝廷に送られたところで、どれだけすごい物かというのを理解できる人がいないんです。

最澄は、順暁という人から密教の一端をもうすでに持ち込んでいた。だから中国でどれだけ密教が重宝されているか、またその素晴らしさがどういう点にあるか、最澄は十分承知している。自分の年下でありながら、また後輩でありながら、空海がいかに優れた密教を持って帰ってきたかということを、朝廷の中で一番理解できたのが最澄だった。

○密教の流布

空海は筑紫の観世音寺、和泉の槇尾山施福寺を経て、帰ってきてから3年ほど経ってからようやく高雄山寺に入ることを許される。嵯峨天皇の知遇を得たのは大体この頃。

弘仁2年には、空海は高雄山寺から乙訓寺に移った。かつてはここに早良親王が幽閉されていた所なんですけど、この別当という、伽藍の修理や経営にあたる役割を付されたが、翌年には高雄山寺に戻った。この二つのお寺がしばらくの間、空海の活動拠点になるんですけども、このときに最澄は空海に会って、持明灌頂じみょうかんじょうを受ける。伝法灌頂でんぽうかんじょうというのは正式の密教僧として、人々に密教の教えを伝える最高資格ですが、結縁灌頂けちえんかんじょうと持明灌頂というのはその前の段階の、密教の縁者になる密教の信者になるということを表す一つの儀式なんですけど、そういう持明灌頂

を最澄は空海から授けられた。最澄のみならず、円澄^{えんちやう}とか泰範^{たいはん}とか光定^{こうじやう}という、比叡山で最澄とともに生活していた最澄のお弟子さん達ですが、この人達も一緒に空海から持明灌頂を受けまして、彼らは法華經に基づく密教的儀礼^{ほけぎぎ}と言える法華儀軌の一尊法を、空海から授けられる。

特に泰範というのは、空海から密教の教えを受け継ぎそれをまた比叡山にもたらして、比叡山における密教をさらに完璧なものにするために最澄が送り込んだ一番の愛弟子だった。ところがこの泰範は、完全に空海に惚れこんでしまい比叡山に帰らない。最澄は、泰範こそ自分亡き後の比叡山延暦寺を委ねようとしていた、そういうお坊さんだということで、再三にわたって泰範に帰山を勧める書状を送るんですけど、空海に変わって高野山の設営等に尽力して、結局は最後まで帰ることがなかった。これが最澄と空海の関係性を冷えさせてしまう一つの原因になってしまう。

教義上の話が出てくるんですけど、空海は次第に嵯峨天皇の思しき良きを得て、空海は文筆の能力がものすごく優れてるということで、嵯峨天皇は空海を手元に呼び寄せて、空海の望みによって自らの修行の場として頂戴したいということで、高野山が修行の場として下賜される。

さらに、空海は平安京の中務省で文鏡秘府論^{ぶんきやうひふろん}という代表的な詩学書を撰述したとあるんですけども、東大寺に灌頂道場を開くなど、天皇との関係を背景にかつての南都仏教の一番の中心にも食い込んで行った。空海自身が書いたメモ帳みたいな物なんですけど、持明灌頂を授けられたお坊さんの名簿。そこに、大僧最澄、名前は僧最澄と出てきます。泰範という名前も出てくる。これは高雄山神護寺に残っている国宝です。

○最澄と空海の決裂

空海と最澄は、最初是最澄の方が明らかに高僧なんです。空海は中国から新しい密教を持ち帰ったけども、朝廷の覚えには雲泥の差がありました。その彼が持ってきた物に対する評価ができる最澄は、年下で身分的にも下位の僧でありながら、空海に対して弟子の礼を取っている。なんとか空海から密教を教えてもらおうとするんです。

ところが、空海からすれば最初はよかったんですけども、やがて仲が冷えていったというのは二人のスタンスの違いがあって、最澄はもうすでに独立して天台宗という一つの宗派を興し、比叡山の延暦寺を拠点に多くの僧侶を従えて一大勢力を張っているわけです。その経営に当たる責任もありますし、弟子の育成もしなければならぬということもあるので、自分自身が空海のところに入り込んで、空海の下で弟子として修行することはできない。だから自分の弟子を代わりに行かして、空海の元にしかない新しい密教関係の經典を借りて、それを自分は書き写して勉強するというやり方で空海から密教を受け継ごうとする。

空海も最初は応じているんですけども、だんだん怒り出すんですね。密教というのは本来、經典を書き写してその理論を学ぶという教えではない。自らが修行し、自らが体得して、師匠と生活を同じくして修行を共にして、そこから受け継ぐのが本来の密教の受伝ということであって、文字の中身から教義を読み解くなんてというのは本来間違ってるというわけです。そしたら最澄は、ではどのくらいあなたの下で修業したら私に密教の教えを授けてくれるのかと言ったら、最低3年。冗談じゃないと最澄は言うんです。3年も自分が比叡山を離れたら、天台宗が駄目になってしまうということで、そうしたことからだんだん仲が冷えてくる。もう一つ悪いのは、最澄は本を借りたら返さない。日本にこれしかないから返せと要求しても、何かと理由をつけて返さない。そういうことで揉めてしまった。

しかも自分が後継者としていた一番の愛弟子の泰範を取られてしまう、こういうことで二人の間は完全に割れてしまう。

「最澄、生年五十、生涯久しからず。住持未だ定まらず。同法は見を各にして六和すべてなし。」同じ法で結局これは、お坊さんたちはいろいろ意見が一つにならない。「独り一乗をになひて俗間に流連す。」独りで天台宗の教えを担って目的通りの生活を送ってるけど、「ただ恨むらくは、閨梨と別居することのみ。」ただ惜しむらくは、お前と別居したことだと。何かもうラブレターに近い、早く帰ってこいよってね。「蓋し、劣を捨てて勝を取るは世上の常理ならん。」天台宗の教え・顕教、真言宗の教え・密教も共に優れたものであって優劣はない。だから、密教が優れているから空海にしがみついて比叡山に帰って来ないということは、私には理解できない。ということで、早く帰って来てくれと言うんですが、自分のかつての師であるけれど今は完全に空海に心酔している泰範は困ってしまうわけです。

これが実は、「空海、叡山の澄和上啓の返報書」、つまり泰範に代わって空海が最澄に宛てた書状です。「又云う、法華一乗と真言一乗と何の優劣か有る、とならば、空海智菟婁に味し、何ぞ玉石を弁へむ。」法華一乗と真言一乗どちらが優れているか、残念ながら私は未熟なもので、その辺のところはわかりません、とそういう言い方をする。「それ如来大師は機に随って薬を投ぐ。」人間の性分と欲するもの目指すものは「千殊」それぞれ異なっていて、それによって薬っていうのは異なってくるんだよ。病気によって薬を与えるのと同じように、病気が色々あれば薬も色々だと。「大小鑊を並べ、一三轍を争ふ。権実別ち難く」権は仮、実は実態、これが偽物、これが本物、それは判別しがたい。「顕密濫し易し。」顕教と密教はまた同じように別ち難いものだという事。要は、あなたが言うように、顕教と密教どちらの負けかわかりません。わからないけども、ここは大事

なことです。「空海、未だ六浄除蓋の位に逮ばざれば、誰ぞ能く出仮利物の行に堪へむ。利他の事は悉く大師に譲りたてまつる。」「利他の事は悉く大師に譲りたてまつる」これは大事なことです。最澄が目指している方向性は、忘己利他という他人最勝する法華經の教えを多くの人に広めて、その利益に授かるというのが最澄の目的だという。それがまさに法華一乘。

元々法華經・天台宗の出発した原点は、かつて奈良の興福寺法相宗が説いていたように、人間は生まれながらにしてそれぞれが仏性という仏になる素質を受け継いでいて、中にはすぐ仏になるぐらいの優れた性質を持ってる人もいれば、どうしても仏になれない性質の人もいる。だから、それぞれの人の性分に応じて、どういう救いの道を求めるべきか究めるべきかというのが、法相宗の考え方だったわけですけど、最澄は、それは大乘仏教ではないというわけです。人間それぞれに仏となる素質の違いなどあろうはずがない。すべてが菩薩行によって一律に救われて行くもの。それが利他の教えになるわけです。

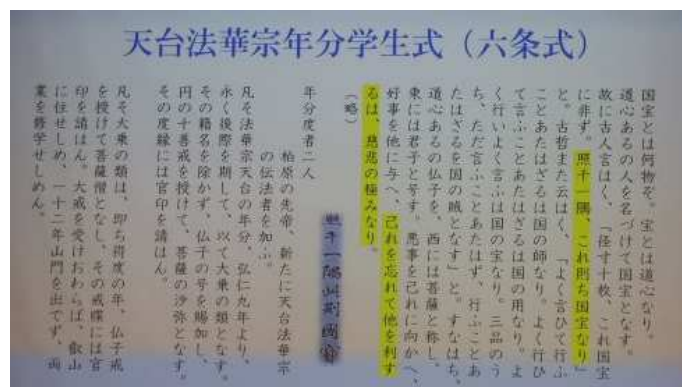
ところが私の教えることは、そのことを否定するわけではない。全体を見たら、「利他」確かにそれは大事なことです。それは最澄に任せます。私は、自分を究められていないので自分を究めることに専念する。これが真言密教の、空海の一歩の主張です。利他を否定しているのではなく、むしろ自分はその域に達していない。己を十分追究して己を究め尽くす、そのために何をするかを考える。これが真言密教だということで、そもそもあなたの目的としているところと、私の考える理想的なそれとは温度差・違いがあります。泰範は私の姿勢に共鳴してくれて、ここへ来てくれているんだから、彼のそういった気持ちを受け取ってやっていただきたいということです。言葉は柔らかかなんですけど、結局これで最澄と空海はそれまでの親交、近い関係は決別します。

空海が高野山を開いた理由は、「空海、大唐より還るとき、数々漂蕩に遇し」彼が遣唐使船に乗って帰るときに、海が荒れて遭難しかかった。「しばらく一の小願を發す。」自分の願を發した。「帰朝の日、必ず諸天の威光を増益し、国界を擁護し、衆生を利し済はんがために、一の禪院を建立し、法によって修行せん。」朝廷に対して、私を守ってくれた暁にはあなたの方のためにお寺を造りますよと言った、という訳です。かつて聖徳太子が四天王寺を造ったときと同じようなことで造ったと空海自身は言っている。

○東国布教と大乘戒壇設立運動

最澄はそのあと東北に出て、会津徳一という法相宗の有名なお坊さんとの間で「三一権実論争」というんですけど、仏性論という仏の性格をどれだけ持ち合わせているかにおいて侃々諤々とした議論を繰り返した。その間に、大乘戒

壇という延暦寺ならではの戒壇を造りたいということで運動を繰り広げて南都諸宗と対立した。そして、南都諸宗の僧綱からの反論を受けて、最澄がまとめたのがこの顕戒論という書物であった。戒律を顕かにする論。だから、最澄は自分がかつて東大寺で受けた授戒を放棄して、改めて比叡山延暦寺に独自の大乘円頓戒という戒壇を設けて、そこで自らの弟子を育成する、それを認めてくれと言った。それが最終的に、最澄が亡くなります直前に大乘戒壇の設立が勅許されたということで、最澄がこの時朝廷に提出した、こういう方針で自分の後進を育成しますよっていう事を書いたのが、天台法華宗年分学生式^{ねんぶんがくしやうしき}ほか三つの申請書、三つを総称して山家学生式^{さんけがくしやうしき}と言うんですけど、その山家学生式の中に有名な「照千一隅、これ則ち国宝なり」という言葉がある。また「己れを忘れて他を利するは、慈悲の極みなり。」忘己利他という言葉。自分のことを忘れて、人々のために尽くす、これこそがまさに天台法華宗の基本方針であると書いてる。最澄は最後、大乘戒壇の設立という長年の悲願を達成して亡くなったということです。現在も戒壇院というのは延暦寺の東塔にあります。



本来は三師七証と言って、受戒するときは3人のお坊さんから戒律を授けられて、7人のお坊さんがそれを証明する役になり儀式をするんですけども、最澄の場合はこの三師というのはお坊さんではなく、釈迦牟尼仏、文殊師利菩薩、弥勒菩薩、このお三方が三師であるということで、比叡山延暦寺の大乘戒壇の中には釈迦如来像と文殊菩薩像と弥勒菩薩像と三つの像が安置されて、この場で天台宗のお坊さんは受戒するということになります。

○空海入寂

空海は淳和天皇から非常に厚遇されて、大僧都という高い位に就かれるんですけど、綜芸種智院^{しゆげいしゆちいん}っていうのは、空海が作った庶民のための教育機関、こういうものを設けた。宮中真言院では835年から、1月の8日から14日までの7日間、天皇のお召しになっている衣を頂いて、それに対して祈禱を行って天皇の無病息災を祈るという。ということまで行って朝廷との緊密化を図っている。最終的には天台宗と同じように年分度者二人をもって、835年、最澄から13年後に高野山でそのまま入寂されて、奥の院

にいまだにお住まいになっているという。こういうことでお二人とも亡くなられる。

○終わりに

最澄と空海、お二人の関係を追ってきましたけども、歴史的に見ますと、最澄というのはものすごい優れた秀才で、いろいろ自分で努力されてあれだけのものを作り上げてきた。対して空海は非常に天才的な節が強い。基本的なスタンスの違いというのは、優劣を語ることはできないという正にその通りなんですけども、最澄の場合、最終目的はあくまでも利他という、他人にどれだけ影響を与えるか。そのために、多くの優れたお坊さんを自分の手で作り出さなければという、今日の教育機関の原点みたいところが比叡山延暦寺にある。それに対して空海は、人のことよりもまず自分を究める、自分が体験し自分が修行し自分が悩んでその中で何を掴むのか、それが大事なことなんだと、このスタンスは決して自己中とか利己的なことじゃなくて、自分をいわゆる究極の所まで持っていくことを目指すのが真言の本来の在り様である。そういう両者の違いというのが象徴的に表れているのではないかと思います。

天台宗も社会的な必要性から密教に取り組みますけど、基本的には顕教というお経の經典の教義に基づく天台宗というのを、法華經というのを一番大事にする。真言宗の場合はオンリー密教で、この密教というのは全てのそういう顕教の裏付けをする部分だと。この両者が一体となって、日本の仏教の一つの形というのは作られてきた。だからそういう意味では、このお二人はどちらがいなくても、今日のような形の日本仏教はでき上がらなかった。まさに「二つの巨星」であったということは間違いない。そういう意味で改めて考えてみますと、やがて天台宗からはたくさんの宗派の祖となる人が輩出されて、その中には教義の違いも出てきて、浄土系もあれば法華系もあれば禅系もあるとなったんですけど、真言はやっぱり未だにオンリー真言で決して派生することなく、真言の教えとして受け継がれるというのは、両者のそういう違いに所以するのではないかと考えます。